

SRIDNEWS LETTER

No. 382 October 国際開発研究者協会 創設者 大来佐武郎

〒102 -0074 東京都千代田区九段南 1-6-17 千代田会館 5 階 FASID 内

URL: <http://www.srid.jp>

地域からの国際協力 ばんけい峠のワイナリー 樽人 田村 修二
20年目の成果と10年先の夢（ウルグアイ 三上隆仁さん 82歳の挑戦） 三上 良悌

1. 幹事会 10月19日(金) 午後6時30分から JBICにて

2. シンポジウム

日時：2007年11月10日（土）午前10時00分から午後5時00分まで

場所：貸し教室・貸し会議室 内海

千代田区三崎町 3-6-15 TEL 03-3262-5976

JR 総武線 水道橋駅 西口（新宿より出口） 徒歩1分

テーマ：「過去をみつめて未来へ：国際開発に関する諸問題への対応」

形式：参加者から発表、その後質疑応答・討議を行う

参加費：1500円（弁当・お茶代：当日徴収）

地域からの国際協力

ばんけい峠のワイナリー

樽人 田村修二

北海道で地場産業を起こす仕事をはじめて 10 年ほど経ちますが、最近やっと国際協
力に手をつけることが出来ました。

時間がかかる理由の第一は国際協力のチャンスが地域になかなかないことです。この
ことは地場産業の発展と同じ状況で、経験のないところに人が育たない、組織が育た
ない、財源がたまらないという分かりきった原則です。さらに決定的なハンディはす
べての条件を集積している東京や大阪と競争しなければならない現実です。

そこで何をするか。あきらめたら発展しないを合言葉にささやかな比較有利を作り上
げることに専念します。まず仲間が集まります。北海道総合研究調査会が地域のシン
クタンクとして人材の集積にあたりました。まさに SRID の 40 年前の創世記です。そ
こから始まる手作りの世界。スタートは原料の豊かな食品加工の世界を選びました。
北海道の原料から出発すれば本州に負けない理由からです。ところが加工機械や包装
材料、その他の産業集積がないために最初、原料はほとんどそのまま本州に送られて
しまいます。

こんな比較不利の中で頑張るためには地域に対する限りない愛情と、マイスターも
どきの職人氣質が頼りとなります。後はサステナブルな生活が出来るかどうかです。
そこで、わが研究室は発酵技術を元に堆肥を製造し、実験農場を開拓して味噌やチー
ズやパンを作り、最後にワインも作り始めました。

そのような手作りの生産と商品化の経験から、北海道の食品加工にフィンランドで発
達した産業クラスター政策を適用することになり、北海道経済の活性化につながりま
した。その経験が国際協力に生かせる機会となったわけです。なにがクラスター政策
のポイントかという、地域にない知恵や経験を外部の人に頼るアドバイザー、加
工や包装の健全性を確認できる地域の研究機関、北海道の場合には道立食品加工研究
センターがこの役を果たします。最後に製品を売するためのマーケットですが、これは
小さく生んで、大きく育てる企業家の役割です。ここに本当の人材が求められるわけ
です。クラスター事業では、三年間は飲まず、食わずの覚悟を最初に固めます。もち
ろん覚悟だけですが、自分の売上で事業を回転させる原則で、安易に借金をしない事
業計画からです。

この地域の経験を引っさげて昨年はカザフスタン、今年のアゼルバイジャンの加工食品産業の可能性調査を行ってきました。それぞれマクロ経済は石油収入の増加で豊かですが、政治の安定性や地域開発の面ではまさに発展が始まったばかりで、貧富の差の激しい現実や、産業政策に経験がないこと、特にソ連邦の計画経済以外の市場経済、民族経済の経験がないことが共通点です。

資源国は外貨収入があるために食料はじめ生活必需品を輸入に頼りがちで、とかく一点集中の市場経済に陥り、均等な国土の発展が阻害されることになります。

アゼルバイジャンではバクーにほぼ50%の人口が集中し、周りの農村部では、羊と葡萄を飼う自給自足の農業が広がります。都市に行けば何とか生活できるのですが、急成長した都会にはあらゆるインフラが不足して住宅や交通が大混乱に陥ることはわが国でも東南アジアでも経験済みのことです。住み慣れた農村部を活性化の良い方法はないのかが課題です。

そこで考えたのは地域のマーケット。ところが所得の高い都会ではどこも輸入品が一杯でなかなか地場産品が入り込むのは困難。一方田舎では所得がないため、自給自足的な経済で、商品に対する需要は限られているのが現状です。こんな状況では市場経済と言っても地場企業が育つ環境には程遠いのです。

地域の持つもう一つの可能性は急激に悪化する都会の環境から逃れる人々の受け入れ先です。広い意味での観光ですが、そのためには田舎が洗練された魅力を持つことが必要になる。これも時間がかかるテーマになるのですが、外から見るとなかなか魅力的な田舎が目につきます。その中の一つにワイナリーの村があります。乾燥地帯では葡萄の木しか育たないとのことで、村では葡萄作りが盛ん。かつてはロシアが大量に葡萄を買ってくれたとのことですが、今はその工場もなくなって農家それぞれで自家ワインの製造を行っているのです。

わがワイナリーはおそらく世界一小さいワイナリーと思っていたところがその村ではドラム缶一本でワインを製造していました。できたてのワインを青空の下で主人と厳かにテイastingしてみるとなるほどおいしい。原産地の自然がそのまましっかりしたワインを作るのです。それに比べてわがワイナリーの苦労は何なんだと素朴な疑問が生じますが、とにかくワインはその地域の味です。気が付くと私たちの周りには村人の見物客が2重3重と集まって来てお祭りの雰囲気が出来ていました。言葉がわからなくてもおいしいものはおいしい。特産物の品定めをしている不思議な外国人を見にきた観客は。皆こちらの顔色を見て喜んでるのが分かりました。

これだ、これだ。目に浮かんだのは勝沼の葡萄の丘とワイン祭りでした。お金がなくてもおいしいワインが有れば皆幸せになれる。この地方は太古から葡萄の原産地と

のことなので、ご先祖様を敬うワインフェスティバルでも村を挙げてやればいいのでは
と思った次第。まず村のワインの優秀作品をテイステイングで決めることだけでもす
ぐにお祭りになりそうした。しかし誰かお客がいないと張り合いがない。こんなとき
誰がリーダーシップを取るのかが決め手になる。産業クラスターがあればすぐにワイ
ン村が実現するのである。今度またくるからと言って、こられなかったら申し訳ない
と頭を下げた次第です。

国は違っても住民の誇りはどこも一緒とつくづく思った次第です。手作りで産業はお
きる。誰がそれをやるかが問題である。SRID 会員の実践の考え方でしょう。

20年目の成果と10年先の夢

(ウルグアイ 三上隆仁さん 82歳の挑戦)

三上 良悌

以前、SRID ニュースレターにウルグアイの三上さんの「植林からパルプ工場建設」
の話を書いた。

同氏から、このウルグアイの経験をアフリカで生かすことと EM (有用微生物群利用
技術) (注1) をウルグアイで育て世界に普及する夢の原稿 (国際貧困減少・環境改
善指導者育成センター設立構想) を頂いた。

同氏は SRID (特にアフリカ関係 TICAD) 会員の協力を期待している。

(ウルグアイでの植林の成功は、現在世界各国関係企業の注目をあび、参入の競争を
もたらすほどになった。南米とアフリカは以前同一大陸で、地理的類似点があり、経
済発展の段階からも先進国よりウルグアイの方が受け入れられやすい面があると三上
さんは考えている。)

1. 本題に入る前に、前回報告に加えてウルグアイ林業発展と日本との貿易改善の情
報があるので、最初に要点をまとめる。(2004年から木材輸出激増で、2006年
では輸出の60%を占めるまでに その結果肉・ぶどう酒・魚の輸出激減にもかかわらず貿易収支は1993年87%マイナスが2006年15%マイナスに減少している。日
本にとっても資源確保の一端に寄与している)

ウルグアイから対日輸出 (千ドル)

1999年	総額 23,544	肉・ぶどう酒・魚 15,116	64.2%	木材 757	3%
2003年	総額 12,439	肉・ぶどう酒・魚 3,825	30.7%	木材 781	6%
2004年	総額 15,198	肉・ぶどう酒・魚 4,061	26.5%	木材 6,856	42%
2006年	総額 42,755	肉・ぶどう酒・魚 1,847	4.3%	木材 34,474	80%

2. 上記育成センター設立は早成樹脂林業・林産業と EM 技術を 2 本の柱とする。ウルグアイ農牧研究所 INIA、林産業分野のウルグアイ技術研究所 LATU が日本の技術協力でナショナルプロジェクトとして早成樹脂林業・林産業を育て上げた。

2003 年以來、日本の地球環境基金とウルグアイ技術研究所の助成で、日本で開発された EM 技術をウルグアイで総合評価し、食糧生産・環境改善に有効と確認、本年度から EM 技術の国内で総合的普及の段階に入った。林業・林産業と同様ウルグアイを EM モデル国家とした後でアフリカ諸国に普及する。また日本の安全食糧確保に役立つ

以上を項目的に見れば以下の通りである

- (1) ウルグアイの早成樹脂林業・林産業と EM 技術のモデル国家建設
- (2) アフリカ諸国の指導者育成 (JICA 集合研修システム利用期待、TICAD とオイスカ協力期待)
- (3) わが国に対する木材・食糧の供給

3. 計画面概要

(1) ユーカリ・松植林と木材加工

モデル国家建設は 2007 年末完了、指導者育成研修(サハラ砂漠以南、10 名/年、12 ヶ月、4 年 JICA 集合研修、予算 4 年で 180 万ドル

(2) EM 技術部門 第 1 期 2012 年目途の EM モデル国家建設、1)演習センター (ハード) は日本の草の根無償で完成済、研修員宿舎 (ハード) 草の根無償申請予定、普及員養成 (ソフト) IDB/JSF 申請中、2)研究所 建物、日本政府無償と企業寄付計画、人員 15 名 (所長比嘉照夫教授予定) 職員養成 第 2 期指導者育成、2013 年から 2016 年

4. 計画実現のために、オイスカ・ウルグアイ総局 (注 2) とアフリカ日本協議会協力関係の確立、両者で外務省・JICA など依頼、申請などを行う。

(注 1) EM とは Effective Micro-organisms の略で前琉球大学農学部比嘉照夫教授発明の光合成細菌、酵母菌、乳酸菌を主成分とする有用微生物群で強い抗酸化作用を有し、食糧生産、環境改善、工業・医薬分野に有効

(注 2) OISCA-internacional Uruguay ウルグアイ外務省から非営利組織であるとの認証受け、1970 年 7 月 14 日政令第 334/70 号規定恩典を受ける (関税、領事査証料免除など規定)、役員リストには名誉会長、会長、会長代行に続いて国際理事として Ing.Takahito Mikami がある。三上さんは多彩な人生を送られてきたがウルグアイに活躍の場を移され、その多大な貢献に対し外務大臣安部晋太郎 (昭和 59 年) 日本善行会 (平成 19 年) に表彰されている。SRID 海外会員としても長い。